

ちょっと ブレイク しませんか?


第 37 回

「サンキュー・スモーキング」(2005年米国)



イソップ寓話「旅人と真実の女神」(「ちょっとブレイク」の第22回でも紹介)の一節:旅人が荒野で、女がひとり悄然と佇むのを見た。「一体誰です」と尋ねると「真実です」と答える。「どういう訳で町を捨て、こんな所にお住まいか」と問えば、女神の言うには、「以前には、嘘は少数の人の所にしかなかったが、今は誰の所へ行っても、聞くも語るも嘘だらけですから」

「サンキュー・スモーキング」(2005年 米国)は禁煙推奨時代に必見だ。煙草を吸って癌になった少年、嫌煙団体の代表者、厚労省の役人、煙草業界ロビイストのニックがTV討論番組に出席。ニックは「煙草と少年の病気には因果関係がない、煙草団体は少年の生存を祈り青少年の喫煙を防止するキャンペーンで年間5千万ドルを拠出する」と述べ聴衆を丸め込む。ニックは週末にしか会えない息子のジョーイに「煙草は1日で1200人も殺しており、チンギスハーン成吉思汗の殺戮にも匹敵する」と語る。

銃器、酒造の各業界の広告塔と「死の商人」を分かち合う飲み会がニックの唯一の息抜きだった。ある日嫌煙家の上院議員が煙草箱に  を付ける計画をしていることを知り、ニックは対抗策に映画で喫煙場面をと提案。プロデューサーは「過去や近未来の作品なら可能」と応え、名優の喫煙場面を盛り込むと約束。次に、マルボロマンと呼ばれた俳優が肺がんになり訴訟を起こす。ニックはマルボロマンの買収に出かけ、金を反喫煙団体に寄贈するよう提案。マルボロマンはあっさりと陥落。ところがニックが親密になった女性記者から、ハリウッドのプロデューサーとの密約、マルボロマンの買収などを新聞に暴露され状況は一変。公聴会が開かれることになり、結局ニックは首になる。そんなニックを、息子ジョーイが「嫌われ役のパパは情報操作の王だ」となぐさめる。

公聴会当日、ニックはジョーイと元妻同伴で会場入り。嫌煙家たちが次々と証言し、ついにニックは「煙草が健康に悪いからと毒物表示するなら、一度の事故で多数が死亡する旅客機や交通事故で毎日死者を出す車に毒物表示をすべきでは?」と反論。上院議員が「息子が18歳になったら煙草を買い与えるのか」と問うと「息子が喫煙を選択するなら買い与える」と個人の自由意思を尊重する米国人好みの回答で圧倒。だがニックは煙草業界を辞めコンサルタント会社を設立し情報操作で生計をたてる道を選ぶ。

日本では3.11以降「クリーンエナジー原発は清潔電力」というCMが消えた。米国の禁煙運動の出発点は、健康増進ではなく煙草の税収よりも健康障害や内壁汚染の対策費が上回って赤字となってしまったことだった。一方、経済原則で人命が蹂躪された例は公害問題でも数限りない。喫煙は慢性毒性があるが車の排気ガスのような急性毒性はない。人類は古来より煙草・酒精を嗜んできたのも事実だ。煙草で一服すると5分の労働時間の損失という評価もある一方で、アインシュタイン、ハッブル、ピカソのような歴史的な業績は喫煙のお陰だったという評価もある。ハイテクが進んで電子煙草が登場しているが、良いことなのだろうか? 一時の快楽を求めるか健康長寿かは自己決定だ。いずれにしても真実よりも嘘が優先されると人間の生活は最悪となる。



かゆかわ ゆうへい
粥川 裕平
(精神科医・映画評論家)

名古屋工業大学 名誉教授
かゆかわクリニック院長